

### 第3回（2010年）「昭和女子大学女性文化研究賞」選考報告

昭和女子大学女性文化研究賞選考委員会

#### （1）選考経過

2010年の第3回「昭和女子大学女性文化研究賞」の選考対象は、自薦・他薦を含む単著と共著24点であった。

第一次選考は、2月3日、3月8日の両日に、学内選考委員によって行われ、第一次選考基準に沿って候補作として次の単著3点を選んだ（発行月順）。

山根純佳『なぜ女性はケア労働をするのか：性別分業の再生産を超えて』

（勁草書房 2010年2月）

吉田仁美『高等教育における聴覚障害者の自立支援—ユニバーサル・インクルーシブデザインの可能性—』

（ミネルヴァ書房 2010年6月）

木村涼子『＜主婦＞の誕生：婦人雑誌と女性たちの近代』

（吉川弘文館 2010年9月）

これら3点について第二次（最終）選考は4月13日に、学外選考委員の板東久美子氏（文部科学省生涯学習政策局長）と辻村みよ子氏（東北大学大学院法学研究科教授）の出席のもと、女性文化研究賞選考委員会で行われた。検討の結果、男女共同参画社会形成の推進に寄与する点で評価された過去2回とは異なり、本年度は女性文化研究の進展に寄与する著作として、木村涼子氏の著作に第3回「昭和女子大学女性文化研究賞」を贈呈することを決定した。

#### （2）選考結果

第3回（2010年）「昭和女子大学女性文化研究賞」受賞作

木村涼子『＜主婦＞の誕生：婦人雑誌と女性たちの近代』（吉川弘文館 2010年9月）

#### （3）受賞作の選考理由

受賞作の理論的課題は、大衆社会において既存の体制への合意を形成するイデオロギー的社会装置としてのマスメディアの機能とダイナミズムの解明に置かれている。ここでの合意の内実、近代化的なジェンダー秩序の形成とその「第二の自然」としての再生産機能であり、そのため1920年代から1930年代の婦人雑誌、特に大衆婦人雑誌『主婦の友』を集中的に取り上げ、マスメディアと読者との間のニーズをめぐる相互性を丁寧に描出している。

著作の構成は、Ⅰ「ジェンダー化されたメディアの世界—女性読者層と女性向け商業雑誌の誕生」、Ⅱ「婦人雑誌がつくる『主婦』—メディアと女性読者が結んだ三つの関係〈有益〉〈修養〉〈慰安〉」、Ⅲ「『主婦』であることの魅力—メディア空間と日常の統合」の三部から成る。「誌友」という想像上の共同体の機能分析、家事労働を独特の「文化」に築

きあげた実用記事のあり方、家庭内の男性たちを巻き込む家族文化の近代化機能、業績主義的側面における主婦の自己確認・外部評価機能、連載小説という女性向け通俗小説ジャンルの成立を通してのファンタジー創出、表紙美人画の「主婦アイコン」機能などに焦点を当て、「技能」「規範」「ファンタジー」によって構成された「主婦」の世界というメッセージが、ロマンティック・ラブと都市文化に彩られた「甘い生活」として、読者に魅力的に映じて日常生活と接合されていった過程を明瞭に示している。全体的に大変読みやすく書かれている。

本書は、日本の近代的ジェンダー形成期における主婦文化の内実を、読者心理に分け入って集中的に描出している点が評価された。通俗的として見過ごされてしまう素材を丁寧に分析し、その社会装置としての具体的機能を明瞭に析出して見せた点に、最大の功績があるだろう。しかし、形成と再生産のメカニズム分析に集中するあまり、例えば、同時期に、女性参政権要求運動の高まりがあったことや女性労働運動などは視野に入っておらず、そのことは選考委員会でも疑問視された。また体制順応機能に限定したために、例えば文学の社会的機能として通俗小説の現状批判的な読解あるいは変革的挑発の可能性への言及も見られない。しかし半面、外部からの普遍的批判的アプローチと異なり内部構造の分析に丁寧に個別的に集中的に従事する叙事的アプローチによる解明は、現在世界的規模で女性の社会的活躍が進展している中で、「ジェンダー・エンパワーメント指数」(GEM、2009年度 109 カ国中 57 位)に明らかな日本女性のあり方の特異性や日本における強固なジェンダー秩序維持傾向の解析、および近代的主婦像形成期の比較文化的研究に寄与する可能性も開くのではないか、という期待も寄せられた。

一方、他の 2 候補作とともに学位論文を基調としている。山根純佳氏の『なぜ女性はケア労働をするのか』は、家庭と労働市場において再生産される性別分業問題に直接に切り込むテーマを扱い、女性の「エージェンシー」概念を用いて、男女の行為者の「交渉実践」を通しての変動可能性を追求し、「よりよいケアの社会化」への方向性を提起しようとする意欲作である。

吉田仁美氏の『高等教育における聴覚障害者の自立支援』は、研究対象となった聴覚障害者の問題にとどまらず、それを広く超え出ていく影響力を持った社会的意義の高い著作である。事例の限定性と叙述の若さは見られるものの、理論的にも実証的にもこれからますます取り組まれねばならない研究テーマである。今後の一層の研鑽に期待したい。